

インド留学記

その5

闇に生氣湧くインド



東方研究会囑託
保坂俊司

地上の全てを焼き尽くさんばかりの勢いで照り輝いていた太陽も、やがてその鋭い光の刃を闇の鞘に納めるように静かに沈んでゆく。地上を長く這っていた影が、いつか大地の中に解けてゆくころ朱盆のような太陽が、大きな赤い風船のようにゆっくり地平線の上に浮く。この赤い風船は、やがて弧を描く地平線に接するや溶ける様に崩れ落ちてゆく。その瞬間、地平線は

炎のように燃えあがる。西の空が燃え尽きる頃、家々の窓は開け放たれる。日昼、萎えていた木々も俄に活気を取りもどす。ムーンクイーンと呼ばれる花は、夜になるや甘い香りを放ちだす。白い可憐な十字を切つて、この花は香りで人々に語りかける。インドの女性は、恋人にこの花を髪にさしてもらうことを密かに願うとか。名といい香りといい、

その姿の可憐さといい、この花は人々にロマンをさそわずにはおかない。

インドの夜は、砂漠のそれである。昼のそれに比べて、夜の空気はヒンヤリとして膚にこちよい。人々は夜を待ちかねていたように、一斉に外にくりだす。

私がいだデリー大学の寮も同様であった。昼間は一切の窓を難く閉ざし、めばりまでして外気の侵入を防ぎ、室内にジーと籠って勉強していた仲間たちも、夜ともなれば動きだす。甘いところに群がる蟻の様に、庭の片隅に開かれたチャイ屋の周りは学生でごったがえす。二〇〇ワットの電球のもと、私もよく彼等と語りあった。

彼等は異国の学生に非常に好奇心を示してくるので、私は少しもさみしい思いはしなかった。しかし、始めの内は「保坂君、なぜ君はインド人もあまり顧みない宗教なんか学ぶのか、





日本は工業技術がすばらしく発達しているのだから、それを学ばよかったのに」という類の質問に煩わされた。そしてその度に私は、機械文明のゆきずまり、人間性の回復、物質的豊かさの限界等を彼等に納得させねばならなかった。しかし、彼等にはあまり納得してもらえなかったようである。考えてみればそれもそのはずである。彼等はインドのエリートであり、インドを富める国、近代国家として発達させることが彼等の宿命ともいえるわけだから。

勿論、そのことを十分知っていた私は、最後に「インドはまだ前途洋々だからそのような心配はいらない。しかし近代化をインドに先立って行った国が、皆物の豊富さに心を奪われて心で飢えていることを忘れてはならない。その点インドは、文化大国だから心配いらないかもしれないが、君たちのようなエリートがそういう心をいつまでも持っていてほしい」と最後に付

け加えることにしていた。そうすると彼等はいつもよろこんだ。

実際、彼等は私から見るとまったく宗教的生活者そのものだった。寮の部屋各部屋にはめいめいの神様を祭っていたし、しばしば寮内でプージャーと呼ばれる祭りをおこなった。生徒が中心になって、どこからともなく神像を調達してきて、生徒独自の祭りをするのである。この時期になると彼等は妙に生き生きとしてくる、祭りの準備で毎日花がさく。彼等は夜の一時を、毎晩星の降るような空のもとで話し、楽しくすごすのである。

インドの夜は、日本のように酒が入らないので専らチャイト、ミター（甘いお菓子）で更ける。インドの学生は店先に並べられた粗末な椅子とテーブル、まばゆいばかりの電球の下で、インドカレーを食べたあと、チャイを飲むのを楽しみにしている。

私も学校の近くのキングスウエー・キャンパスによく食事に行き、チャイを飲みながら行き交う人を眺めてすごした。

山盛りの果物やミターのみせの前には、いつも子供連れがいたし、食堂には家族連れがひっきりなしにきていた。特に映画の終わる時間ともなると人々は町に溢れる。私にはこの人込みが、子供のころよく行った緑日のような気がして楽しかった。

しかし、このような町のにぎわいとは別に、一步路地に足を踏み入れれば、その闇は深い。特に、私のいた寮は公園の隣にあったために、そこを通らねば帰れないのである。真つ暗なところも気持ちかわるかったが、友達によるとそこには毒へびが沢山いて危険なのだという。さらには、そこではよく山賊がでて殺人事件もあるとか、昼とは少々ことなったインドの顔が夜のインドにはあるのである。